

仏心と葬儀

ーその2ー

愛児の供養に再起の道

「親の死に目に会えない」以上に「子が親より先立つ」ことは最大の親不孝であると、昔から言われています。どちらにしても、残された家族が味わう嘆きや悲しみは同じなのですが、親が子より先に旅立つのが世のなりである以上、その順序に逆らって親を悲嘆にくれさせるとは何事かと。人が生きてゆく上で幾度も訪れるであろう悲劇の中でも、これに勝るものはないということなのでしょう。だからと言って、満三歳を待つことなく、まったくの不慮の事故で命を落としてしまった愛児に何の罪があるでしょう。むしろ親の方が「罪は守ってやれなかった自分にある」と自分を責め続け、打ちのめされるのが普通なのかも知れません。さすがに気丈な飛田の妻・芳栄も生きる気力を失いかけ、ショックで寝込んでしまいました。

飛田も勤めを一カ月も休み、呆然と日々を過ごしましたが、やがて気持ち落ち着くうちに「これからどうして生きて行こう」という自問の念が湧き起こり、思い浮かんだのが「愛児への供養」という自然な結論でした。今できることは、あの世で安

らかに眠ってほしいと願い続けるだけだという想いが、そのうち「葬儀の仕事をしてみようか」という、自分でもまったく思いがけないプランが浮かんできたのでした。

「葬儀を仕事に」転職を決意

「まだ26歳で、神仏への信仰心など何もなかった私でしたが、自分たち夫婦が救われるのはこれしかない」と、神仏にすがる思いで葬儀社を始める決心をした」と飛田は述懐します。この瞬間こそ、飛田の人生において「仏心」に目覚めた機縁なのでした。

しかし、開業の資金はおろか葬儀についての知識も皆無の飛田ではありましたが、幸いなことに21歳の時に早々とマイホームを建てていたことから、この家を売って開業資金にあて、二人きりに戻った夫婦はアパート住まいを始めました。家を売った130万円を元手に「有限会社丸和堂」を設立、営業を開始したのは昭和43年7月10日。愛児・秀己の死からわずかに5カ月後のことで、飛田26歳の夏のことでした。



つづく